

トンチャンとは、豚の腸を鉄板のうえで焼き、タレをつけて食うのである。トンチャンという名称は誰がいつごろから言い出したのか私は知らない。私がトンチャンの味を知ったのは、炭坑の組合長をしていたときで、バクダン（アルコール）をのみなから、トンチャンをつまんだものだ。はじめて口にいれるときは、あまり気持の

良いものではなかった。しかし同好の友達が教えるように、よくやけたものを十分にタレにつけて食うと、とてもおいしいものであることがわかってきた。なれるにつれて、なまやけが軟らかくてうまいことが分った。タレも自家製で、おの自分の口にあう味をつくる。材料は、にんにく、とうがらし、しょうゆなど。サラダオイを一、二滴おとすとうまい。トンチャンを食べるときは、いつも五人で屠殺場から、豚の臓物を一キロほど買ってくる。一週間に一度はたべたものだ。秋松の田舎へ行っても、部落の人たちが、何事かあるとトンチャンを食べたものである。福岡ではどこでも大いに食う。またトンチャンを売る店も沢山ある。これは25年も前のことである。近頃は東京でもトンチャンが盛んのようにである。

江戸っ子もずいぶん変ったものだ。カロリーも豊富であるし、栄養もある。こんなにうまいものを食わずきらいで、とやかく言っていた江戸っ子がチャンチャラおかしい。トンチャンが食える仲間が沢山いる。キレイゴトだけのおつきあいはマッピラごめんだ。

私はいや過去をふりかえって見ると十五、六才頃夜店でよく食べた「牛めし」も「やきとり」（子供相手の）も、みな臓物をきれいに洗い、小さく切って味噌をつけて、焼いたり、煮たりして売っていたものである。この頃からトンチャンは世の中の良き食べ物であった。

最近スーパーやマーケットにも、きれいに洗ったトンチャンがビニールの袋に入れて売っている。タレまでつけて便利になったものである。私の妻は残念ながら、この美味さを知らない。いわゆる食わず嫌いというやつである。そのくせ鳥の肝やぞうもつを良く買って来て、皆と一緒に食べる。彼女は観念的に「とり」と「ぶた」を、わけ隔てしているようだ。昔、殿様が「おしのび」で町に出て、さんまやうなぎのかばやきを食べ、味を覚え、城中へ帰ってからも、さんまやかばやきをつくれと

家臣を困らせたという話が、落語などで今なお語られているが、これは何を意味するのであろうか。この落語は庶民にいろいろな意味で教えている。まず第一に権力者どもが、グスの食物と思っていたさんまやうなぎを美味だと感覚したことである。その他、小気味の良い諷刺がある。僕はあえて妻を批難しておるのではない。食わず嫌いで意地をはることだけは、やめてもらいたいと思う。さて、本論のトンチャンに話を戻す。僕も68才の今日上も下も入れ歯で肉もトンチャンも食べられない。こんな悲しいことはない。トンチャンは丸呑みにしても消化が良いと聞いているが、歯が入れ歯では味もない。毎日みそしる、とうふ、なっとう、わかめ、さといも、ラーメン、たまご、ミルク、コーヒー、V S O P I パイ、果

投稿

辻潤とあくび

私は絶望の亡者かミイラのような人間なのです。眼は持っていますがいつでも内側に向けられているので、外界の物象があまりハッキリとは映じてこないのです。

しかし、まだ死にたくはありません。

生物的意識と動物的精神を抱きながら大都会の泥沼で

物ジュースなどを食べて生きている仕末で、トンチャンは今となっては昔の夢にすぎない。僕は韓国や朝鮮など友達が沢山いるので各国の食物の食べ方を教わった。なかでも、渋谷でスナックをしている平川君には格別お世話になった。トンチャンで一番思い出すことと言えば、何と言っても九州時代である。穂波町タダクマにある韓国人のトンチャン屋は、私の行きつけの馴染の店で、私が行くときと間よりない四畳半位の座敷（経営者の婆さんの寝る座敷）へ通し一番良いやわらかいトンチャンを出してくれたものである。僕は若い連中をつれて行き、その店で自慢話をしたものである。とにかく、その店で僕は「ヤンバンサラメ」であった。（原文カナモジタイブ、三浦書き換え）

偶にローカルカラーを発揮して都々逸の一つ位呻ったっていいじゃありませんか？

（石コロと豚の涙）

自分は今風呂から上って一本残っていた煙草を燻らしていた。口を尖らせて、煙りの輪を作って遊んだりもした。そして、この煙草を吸い終ったら、どうしようかと考えた。煙草の煙りが心細く成ってくると、いつしかそんな事を考える様に成ってしまった。習慣に成ってしまった。

そして、もう半分も残っていない。

自分は今、何を考えているのかも解らないでいる。まるで子供の様な答えだが致し方ない。どうしたらいいのか解らないし、どうすればいいのかも解らない。結局、どうにか成るのだからけれど、それまでどうしたらいいのか解らないでいる。

全っく呆れて物も言えない。

こんな子を持った親は哀れだ

自分は別に運命論者じゃないが、運命だと思って諦めてくれたら嬉しい。又、そう思っていたくよりしうがない。

芸術は一種の売春だと確かボオドレエルがいった。こ

これはアイロニーとして面白い言葉だとしても、女ならぬ彼、ボオドレエルは果して売春の味をどの深さまで噛みしめ得たことであろう？

いづれ身すぎ、世すぎに楽なものあろう筈はない。一国の宰相や、一代の富豪が偶々人手にかかったとて、別段驚くには当らない。人生にボンヤリ生きている事でさえが既に生命がけでさえある。……

（「性格破産者」の手帳より）

自分はいたって真面目で、蛙が笑っても自分は笑わないし、コオロギが蛙の御機嫌をとっても自分は、顔のシワひとつつくらないでいられる。

自分はいたって真面目で、いくつかの星を見ていた。いくら星が綺麗だからって、それを見て涙を流す女などめったにいないものではない。自分はそんな女は馬鹿だと思っている。死んでしまったらいいと思っている。自分是他人の不幸を喜ぶ者ではないが、涙を見るより死んでくれた方がどんなにいいかとも思っている。

今は夜で、外でコオロギが鳴いている。室ではたくさんのアリンコの行進の真最中で、自分はそれを横目で見ながら、すね毛を何本か引っ張っているのです。

或人曰く、人間らしき人間の取るべき、道四ツあり。

反逆を起すか、切腹するか、詩人になるか、坊主になるか云々と、四ツの優劣暫時問わず、反逆は最も面白きものなるべし。

哲学と芸術とは相互に憧憬す——ワイニンゲル

費用とは全て雪隠の紙の如きものなり。

人生の緊急問題は今夜のオカズなり。

科学は走馬燈の如し。

(Mélanges)

自分は辻潤を評論したり解説したりするつもりは毛頭ないのです。ただ、辻潤が好きだから、辻潤の書いたものが好きだから、正確に一字も間違わずに書き写すまでです。

自分はひとりの代書屋です。

前にもいった様に、自分は他人の不幸を喜ぶ者では決してないが、それにも増して、自分の不幸を最も恐れる者です。だから、もし自分に不幸を押しつける者が出て来たら、自分は臆病な兎の様に無力な牙をむくでしょう。

首をくくった、ひとりの若い男が、白い目をむきながら、アリの様な声で自分にいました。

何も書くな。

何も読むな。

労働運動寸感

大杉栄の論説や随筆は全集で何回も読み返し、激しい闘志と幅広い知識に裏打ちされた説得力に感服したものである。然し今度、近藤真柄さんと大島英三郎さんのご努力による、ナマの新聞同様の『労働運動』複刻版に接して、受取る感じは更に強烈であった。これは当時のニュースや討論や解説があるから、状況をほうふつとさせその中での大杉の志向と努力がより鮮明になるからだ。広告にも当時の世相が反映している。大杉の思想、行動その意気や背景の歴史などについては、多くの人が書いてあるからここでは省き、複刻版を広くおすすめる次第である（黒色戦線社刊ウニタ発売、五千円）

蛇足でもないが、アナボル問題にちなんで、私が模索というか試行錯誤をくり返してきた事を記そう。

敗戦後労働運動にとびこんだ私は、共産党と共同闘争

野火

前田幸長君から、8月25日、パリ、イタリー、スイス、ベルギー、オランダ、フランスの

何も思うな。

ただ生きて在れ！

その時、自分は空を見ていました。

「君は文士か？」

「否」

「君はソシアリストか？」

「否」

「アナキストか？」

「僕はこの世の一切の職業と主義名称とを唾棄する。」

「それならなにか？」

「スカラ・ジブシイとも呼んでくれ」

(Mélanges)

自分は今、ひとつ小さなあくびをしたのです。

ハギシン

した。総同盟は戦前の綱領の再現であり、産別は戦前の赤色組合主義の再現であった。私は改良主義と組むよりは、後者の戦列で反代々木派の獲得にとめるほうがベターだと考えたからだ。アナ連内でも論争がくり返されボルとの苦闘を主張した岡本潤氏が去り、戦前無政府共産党を組織した一派が脱退した。わずかなアナキストは反共の民主化同盟に加わる者と、産別系に属してレッドパージの巻添えをくう者とに分解した。又工的中立などは存在できなかったのだ。朝鮮の同志も民団系と総連系に別れ、それぞれに埋没していった。

いま、会津の新明文吉氏も、極左とよばれるセクトに呼びかける事の有効性を語っている。私も、民社党に癒着する同盟の戦闘化をはかるよりは、前進的なセクトの糾合につとめたほうがいいと考えている。

旅を終え、いまパリにいます。今日ヴェネズエラ、カスカスのグラシア氏が私たちのホテルを訪ねてきました。

グラシア夫妻とスペイン同志と昼食を共にしつつ、15年前日本に来たときのことなど、懐しく語り合いました。ごく簡単に報告します。

イタリアは三つの全国的組織があり、1、GAF（グループ・アナルキア・フェデラチオーネ、ミラノ、機関紙リビスタ・アナルキア、月刊七〇〇〇）、2、FAI（フェデラチオーネ・アナルキア・イタリア、ローマ、機関紙ウマニタ・ノーヴァ、週刊三〇〇〇）、3、GIA（グループ・イニシアチヴ・アナルキア、アンコーナ機関紙インテルナチオナーレ、月刊、三〇〇〇）で、大小のグループがほとんど全土に点在、各グループはこれらの三つの全国組織のいずれかに加盟、たがいに網目のように連けられています。この三つの以外に、シニストラ・リベルタリア（カタニア月刊二〇〇〇）という独立した新しい全国組織がある。また出版活動は、1、ヴオロンタ（アウレリオ・ケッサ、ピストリア）、2、シニストラ・リベルタリア（アルフレッド・ボナンノ、カタニア）、3、フィアコラ（フランコ・ジッジョ、ラケーサ）の三つが書物を発行しています。（クロ、バク、ブルードン、マラテスタ、ピエトロ・ブーク、エミル・ブシエ、エミル・アルス等々）

全国の組織の外、地方連盟を結成しています。これは

その地方のグループで組織され、GAFのグループ、FAIのグループ、GIAのグループが地方的に連けいられている。その主なものとして、a、ミラノ（オルガニザチオーネ・アナルキア・ミラノーゼ、15グループ）、b、ピサ（フェデラチオーネ・アナルキア・ピサーナ）、c、トスカナ地方（フィレンツェ、ピサ、ピストリアの各市でフェデラチオーネ・アナルキア・トスカナ）、d、リヴォルノ（フェデラチオーネ・アナルキア・リヴォルノ）等。その他独立したグループとして、e、トリノ（エリゼ・ルクリュ研究グループ）、f、ベルガモ（モビメント・アナルキスト・コムニスト）、g、ナポリ（クロンシュタット・グループ）、h、シデルノ（アフリコ・ノヴォ）など。グループ組織は、トリノやミラノをはじめとして約37都市にある。（都市名省略、三浦）

イタリアで感銘したことは、批判はするけれど、たがいに連けいられていること。若い人を中心に活動していること。若い人は老人の言に素直に耳をかたむけていること。老人は頑固に自説を固執しないこと、（二、三の例外はあった）等です。

イタリアに比べるとフランスはばらばらです。たがいにイニシヤティヴを主張してゆずらず争っています。CNTも三つに分れ、たがいに非難のみで連けいられない。

老人が前面に陣取って若者に席をゆずる気配がない。

イタリアの運動はいま活きています。イタリアの運動のも一つの特徴はヴィオランズ（暴力）です。これについて議論しかけたのですが、言葉が不自由で、たがいに誤解があつては、ということの後日、文面でたがいの意見を述べあうことにしましたが、ノン・ヴィオランズ（非暴力）をガンジズムと同一に理解しているように受け取れました。警察とファシストの暴力（この10年間にすでに10人の死者、今年の三月に20才のフランコ・マルコニがファシストに殺された事件あり）に対し暴力をもって闘かうという意見が支配的で、革命的手段としてヴィオランズを用いるのかということとは十分話合うことができませんでした。

ローマからシシリ（カタニーヤ）まで満員列車（買出列車を思わせる位）で20時間（片道）、パリ・ローマ（直通で20時間）、3晩列車の中で過すという旅行の後ベルギー、オランダ、マルセイユ、ボルドーを続けての旅行に少し疲れました。

8月21日、とにかくそれらの旅行を終え、いまパリであちこちの仲間を訪問しています。フロン・リベルターは一九六九年（カララ大会の翌年）FAF（フランスアナリススト連盟）から分れ、ORAAの組織をつくり、

その機関紙がフロン・リベルテールです。ここは若い人ばかりですが、その傾向はコミュニスト・リベルテールで、ORAAのイニシヤチヴの下に組織しようという考えで、ルモンド・リベルテールの連合組織論とは決定的に食いちがう訳です。ルモンド・リベルテールもいま若い人が中心に、モリス・ジュワヨはすでに引退し、原稿を寄せるだけです。ソリダリテ・ウーヴリエール（労働者連帯）は若い労働者の集りでアナルコ・サンジカリズム組織の機関紙です。（パリに3グループ。他にボルドとランスに各1グループ、各40人位）。ソリダリテ・ウーヴリエールはフロン・リベルテールの呼びかけを断わり、ルモンド・リベルテールと連けいられています。71年のパリのインタナショナル会議は、フロン・リベルテールのイニシヤティヴによって開かれたもので、ルモンド・リベルテールは無関係ということでした。

スイスORAAで若いデンマークの夫婦に会い、デンマークで15人のメンバーでデンマーク連盟を結成し、プロバガンダを展開していることを知りました。

スウェーデン連盟は3年前解散し、後再組織したが、去年再び解散、いまは連盟は存在しない。アナルコ・サンジカの組合がかなり強力な組織ということですが。

各地で日本の連盟の再組織の必要、労働運動の必要を

問われました。

すでに時を廻りましたので今日はこれで終ります、こちらにはすでに秋風です。 前田

X

同じ前田君が帰国報告を横倉君に送った。(適録する)

9月9日無事帰って参りました。お便りをありがとうございました。出発前には長いと思われました55日の旅程もあったという間にすぎてしまいました、予定の13を消化しきれず、すこし心残りですが、とにかくイタリア、スイス、フランス、ベルギー、オランダ、イギリスの6ヶ国を回り、多数の同志と交流しました。各地で同じように問われたことは、日本の連盟の再建の可否、労働運動の推進、国際連帯の必要等でした。

(イタリア、省略)、フランスは3つの大きな組織があり、それぞれル・モンド・リベルテール(フランス・アナ連、月刊三〇〇〇)、ソリダリテ・ウーヴリエール(労働者連帯、アナルコ・サンジカ同盟、月刊二〇〇〇)、コンバ・サンジカリスト(ONTスペイン、週刊三〇〇〇)——これはエスボアルの間違ひではないかと思うコンバ・サンジカリストは月刊である(三浦)

——前二者間には連係がありますが、ONTスペインは全く独自運動をしています。それはONTスペインは亡

命スペイン人であることが大きな要因で、打倒フランコ

およびスペインへ帰ること、帰ってからの運動ということにすべてが集中しているからです。・・・ONTスペインのあり方に批判するものがあり、このために三つに分れています。グラシアも批判的な立場にあり、ONTスペインの事情(グラシアも同じ亡命という)は理解しつつも、アナルコ・サンジカリズムの運動として、もっと広域(スペインのみにとどめず、国際的な)な宣伝活動をするべきだと言います。また亡命後に生れた第二世代は親はスペイン人であることを忘れませんが、彼らは生れ、育った所(フランス)の人間であり、その意味でこれも親たちのONTスペインの事情に充分な理解をもちつつも、やはり批判的であります。実際私たちはマルセイユでONT・AJFの大会に参加しましたが、百人以上の参加者の95%—98%が老人でした。大会は意気盛でしたが、ONTも一代限りで終りか、という感をうけたものでした。(ONTはスペインの全国労働組合連合AITは国際労働者協会でバクーニン後の国際的な連合体。主としてスペイン語圏の労働者が参加している。イギリスのサンジカリスト組合も参加していた。今フランスとウェネズエラで機関紙を出している。三浦)。・・・オランダも若々しい力のグループが熱心な活動を行な

っています。

フリーダム(ロンドン)、ル・モンド・リベルテール(パリ)、ウミニタ・ノヴァ(ローマ)の三紙は、その歴史と伝統の名と権威によりかかって新聞を発行し、本を出版して売ることには終始しています。同じ新聞を発行してもリヴィスタ・アナルキア(ミラノ)、ソリダリテ・ウーヴリエール(パリ)、ブラック・フラッグ(ロンドン)は、運動体の機関紙としての発行であり、前三者とのちがいは、はっきりと知ることができました。この批判はヨーロッパのあちこちでもきました。しかしフランスの場合、批判が非難となって、喧嘩別れですが、現在のイタリアは批判しつつも連係しているところに、私は深く感銘しました。そしてイタリアの活動の中心は若い労働者、学生です。18位から20才台の青年であり、壮老年は彼等の後でニコニコ笑って見えています。そして時折青年たちが意見を求めるとそれに答え、また青年も先輩者の言によく耳をかたむけています。

ヨーロッパ人と日本人のちがいは、前者は夫婦ともアナキストであり時には女の方が強く発言することもあるということです。私たちは今回の旅行で会ったすべての夫婦が例外なくそうで、私たちの話合いにも夫婦でアナキズムに関し話し合えるということでした。・・・

(9月12日、前田幸長)

X

瓜生祐喜君から

9・9村統一の祭、日頃村中がせわしいのに、今日だけはヒッソリとして家庭内に入り酒を飲み、またたまに朝寝坊をする人等さまざまである。豊年踊りの祭りばやしがとなりの村々から聞えてきます。一見のどかな田園風景である。二ヶ月も過ぎると、出稼ぎ、土方仕事に追いこまれて、こんな情景を見るには正月位しかありません。明日になると、となりの家では朝何時に起きるだろう。となりの家はいつ稲刈りに入るだろうかと、人には負けたくない。共に手に手をとるってなどと言っていられない状態が明日から始まるのです。・・・私の家から四、五百メートルの所に国道が走るそうです。皆、坪いくらかなどと今から土地の値上りを楽しみに待っている見たいです。・・・

X

9月16日集会

関東大震災、そして同志大杉栄、伊藤野枝、そして幼ない橘宗一の虐殺、それから50年、僕たちは今年も京都、名古屋、長野の同志たちと呼応して記念会を開いた。京都、名古屋、長野は講演を中心に大衆に呼びかけ、東京

では案内状によって同志たちに呼びかけて、朝10時から討論会、若い人々を中心に全国的な連合が討議された。これは慎重を要する問題なので結論や実行を急がなかった。しかし全国の同志たちがたがいに結び合いたいということは、皆の心の願ひである。

夜6・30時から若い人たちも参加して主として老年者（残念ながらわれわれの中には中間層が薄い）の座談会だった。この日は静岡新聞の主催で、静岡でも記念会があったとのことである。

地震の噂、公害、戦備、世界はふたたび終末症状を呈している。人間が生き残るために、人間のドン底からの生の主張としてのアナリズムがジリジリと人間の切望として求められている。（三浦）

X
SRFから

9・16日に一緒にやったらと呼びかけたのだったが、次のような手紙を受取った。僕たちの間にマルクス主義者や創価学会信者のように、少くとも革命の日には同じ枕に死なねばならない同志に対して、不利になるような言葉を投げつけて克服しようとするような傾向が残っていることは悲しむべきことだ。理論的には正々堂々と戦うべきだが、悪罵や人身攻撃のような卑怯な真似はマル

クス主義者共に返上すべきだ。でなくては世界的にも、全国的にも、地域的にすら手を握り合うことはできない。アナリズムは百人百様なのだ。（三浦）

・・・9・16集会の件については全く無関係の態度をとりました。今一番必要なのは心を一つにしたアナリストの運動組織であって、かつての連盟のごとき幅広さは運動の前進にとっては第二義的なことと考えています。自らの信ずる道をのみまい進する所存です。・・・SRF崩壊などとタワゴト・・・一部で解散声明が出たまでウワサされているようですが、そのような流言には何一つ真実がありません。近々SRFの機関紙をおとどけできると思いますが。確固たる無政府革命者の組織を共通の信条の下に建設し抜くこと、このことが私にとって現在最大の課題であると確信しております。・・・三浦さんとの間に原則的に非和解的なものがあることになり、スッキリしません。（非暴力の問題のこと―三浦）こんなことを記したのも、一日も早く何のタメライもなく同志三浦と呼んで見たい気持があるからです。・・・（このように直接本人に言うことは、お互に何の支障も起らない。印刷物にして悪罵や中傷などをすべきではない。われわれが手握るのは人間としてである。革命後の社会にはそれこそアナもボルも犬も猫も入るのだ。そこで思

想の純潔などと排他的な行動をしたら、革命はつぶれるではないか。三浦）

X
今月は原稿がたくさん集った。増頁しても追付かないから、だんだんに出すことにする。（三浦）

アナ連は再建さるべきか？

―連絡機関なら異議なし―

9月16日、水道橋の労政会館で、アナ系の二つの会合があった。（大杉栄虐殺50周年記念）午前は「リベルテール」の青年部の、夜は青年も混ってはいいたが、大体が60才以上の人が多いオールドの会だった。杉のことなど、ともに多くは語られなかった。

細かい経緯やそこであった、何十年ぶりの古い同志達の個人的な感懐など、ここでは割愛しよう。

話しは戦后21年にアナ系の諸胞芽の総結集として発足した、日本アナキスト連盟と、その崩壊と解散、そしていまそれを再建すべきかどうかであった。

京都のある若い同志からの呼びかけがあった。東京、リベルテールの周辺の同志はオールドもヤングも、それ

X

九月二十九、三十日、沼津に山鹿ミカ（故泰治夫人）さんを訪ねた。今年はもう三年だ。ミカさんもアイノさんも元気だ。杉藤君も来合わせた。（三浦）

やまもと あき

が全国的な力の結集の必要ということでは、誰れも異存がなかった。だが、その組織のあり方については、ヤングとオールドの間にギャップがあり、またそれぞれの間でも議論が百出して、これだという方向はまとまらなかった。夜の会で、終り近くになって、「日本アナキズム運動史」の小松君が印象を総括してこう言った。

「ルーズな連絡機能をはたす組織は、いまでも可能かもしれないが、現状でもっと機能的に動ける組織となると、それはこれから、まだかなりの積み重ねが必要だと思ふように感じられた。」

小松氏が何時来たのか知らなかった。20分ほどヤングとオールドの応答を聞きかじっただけかもしれない。

が観察は正鵠を得ていた。想像していた通りだ。「その議論は五〇年前と少しも変わらない」（古川老）。アナキストの組織論など、まとまるはずがない。何時間、何日、ぶっ通して議論しても。

ヤングはもっと機能的な組織が欲しい。オールドは原理的にもこれは二の足を踏むしその経験上も否定的だ。公約数は連絡調整機能だけの全国組織である。

アナ連の轍を踏むな

それはアナ連の再建か否か？ イエスでもあり、ノーでもある。あの結成時の四人か五人の政治結社届に名を連ねた一人として。

あれは、戦後のアナキストの結集体であったか？ その必要があつた組織をつくつたのか？ イエスでもありノーでもある。

今と同じ、全国的な連絡機関なら、誰れもが必要を痛感していた。が中央から号令される組織なら、アナキストなら、あの時でも笑殺したであろう。だから当然に、個人を単位としたアナキストの Federation (連盟) だった。第一にあの当時に、東京にも地方にもグループはあつても、団体組織はなかったのだから。だから個の連合だった。

一つの考え方の機関紙に化した。しかもそれだけで自立のできないものに、自協の「黒旗の下」に結集したところのあるものが、熱意を失うのは当然である。やがて山鹿老に誘われて世界人権宣言や、WRI の方に傾斜してアナ連からは手を切った。

これは僕個人の狭い経験であるが分解作用はこうして起った。戦後アナキズム運動の主流に棹したのは、いま俺達だと自負する人がいるだろう。が「平民新聞」が自立で出せなくなり、「自由連合」もその文化人グループが、それまでの地方の読者組織を通じて紙代を集める機関紙となつたときに、実はその時点で、アナ連は機能を失つて事実上の崩壊をしていたのである。

だから、その結成に参加したかつての実践派からみれば、二、三年前に解散したアナ連は、機能的には21年最初のアナ連でない。戦前の旧自連系のアナ連である。

東京から「自由連合」の発行は関西へ移した。そして関西側の発意を軸として、平凡社系の文化人グループが呼応して自らの手でアナ連を形式的にも止めをさした。

ヤングとオールドの断層

アナ連は解散する必要がなかったのではないかとの感懐はいまでも、東京ではオールドを中心に強い。これは

しかしそれができると、すぐ変貌して行つた。連盟は機関紙を出す財源をもつていた。政治結社の届けをすれば、用紙を配給される権利を得ることができた。紙の不足、統制時代である。必要なのは三連か四連だ、まきとりで配給される新聞用紙を闇で処分すれば、連盟の機関紙製作、発送、その上にまだ多少の活動費はあつたはずだから、事務所も借りることができた。

その連盟の会計を握るものがイニシアチブをもつ。その見解と主張が強く打ち出される。やがて、読売の印刷部の東印系を中心にクラブが結成され、近藤や大沢、遠藤の諸君達と肌合いがなくなつた。

僕は旧自協系だ。アナキズムは労働者にとってはアナルコ・サンジカだ。日常斗争を無視して、アナキキーは解釈し切れないのだ。戦前と同じ分解が起つた。労働者とインテリ、観念派と実践派の二つの分解作用が進んで行つた。

機関紙「平民新聞」この巾着を握って行つたのは平凡社グループを中心に、詩人や、物書き、インテリ、文化人だった。

がそれは何年のことだったか。もう用紙の闇売りで、機関紙発行を維持できなくなつた。資金が必要だ。僕も相談をうけたが断つた理由は、アナキキーの諸流の中の

老人達の郷愁だろう。そうだ。解散せずに、その日赤の結成の当時の一つの機能、全国的な連絡組織だけに立ち帰ればよかつたかもしれない。しかし、所詮この討論はいくらやっても実らなかつたであろう。アナ連は夙に早く近憲の生きてる時代にすでに実質的には崩壊してしまつていたのである。小松君の運動史は26年と記している。

やはりあれはあの時点で、二、三年前に解散しておく方が早道だった。がそれにしても、この全国組織の再建に、京都からアピールした人々と、旧自連系の僕からみれば文化的、観念派とがどこまで手を携えることができるのだろうか？ どうせ連絡機関だ、嫌ならそれは参加してもしなくともよい。まず協力できるところだけがやればよい。

だが、それでは16日の会合を通じてヤングの意欲は満足しないだろうとも推察される。

リベルテールはどうだ。クラブはどうだという発想そのもののなかに新しい組織はグループ、団体の意志決定によつて組織体が全国連合をつくるのが再建の意義であるかのような響きがあつた。またあるヤングの一派は斗う戦組織こそ、いま求めているのだという発言もあつた。斗う組織、運動する組織の連合体としてのアナ連の再建ならそれは過急にはできないだろうというより、お

そらく永久に結成できないだろう。いやそんなものアナキストとしてつくるべきでないというのがオールドの経験上の発言でもあった。下手すると、そのヤングのあせりは、二見・相沢のような逸脱にはまりこむ危険性を感じるのはオールドの老婆心だけだろうか？

戦斗組織。若い情熱がつくりたければつくればよい。また日本は真の独立国ではない。アメリカの鉄の爪に握まれた象徴天皇制下の代貸の自民党が支配する被占領地の息子である。ヤングはアラブと同じ被占領地の子供達だ。万一そうしたヤングの一つのグループがハイジャックやテロに暴走することがあっても、日本のアナキークの戦線に打撃を与えない、慎重な配慮をして動けばよいのではないか。

ヤングがオールドに助言と援助を求める。それはそれでよい。がたとえオールドが助言しても押しつけ説教ではそれをうけ入れるヤングではない。世代のギャップはここにも避けられない。オールドはオールドで手をつなぎ、できることをやればよい。たとえ茶飲み話に集り合う会合であったにしても、大正・昭和の半世紀を闘い抜き、生き残ったオールドのいまここに存在だけでもヤングにとって無意味ではない。だからオールドのこの情緒的な一種の養老院に対してヤングよ！その兄貴達よ養

ってくれとは誰れも求めてはいない。被占領地の子供達、多少のいたずらに、オールドが手を焼くことがあっても、手をさしのべられる範囲では暖かい眼が見守ることであろう。オールドはオールドの茶飲会、それでも組織といえないことはない。

そのオールドとヤングをつなぐどんなに細い紐帯であったにしても、全国的な連絡調整機関か、網の目か、提携組織としての Association か Federation がある必要性は、誰れにも痛感されている。

がもしその提携組織が一つの主張、鑄型をもった機関紙をもたねばならないと考えると、旧アナ連と同じ軌跡をつくることになるのであるまいか。

あの晩も「十人十色」でヤングとオールドで白熱した議論の花が咲いた。しかし百人のアナキストがよれば、百色であることは避けられない。何か共通点がある以上は、ボルや体制派よりも敵ではない。差違があるからその劃一性を追求して抗争するのではなく、その共通項によって、手を携えることができないなら、人類の明日を信ずることができる。

(73・9・17)

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月一回15日発行

昭和48年10月15日発行 Vo. N No11

編集兼発行者 三 浦 精 一

発 行 所 東京都練馬区 2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

(振替東京133830番 三浦 精一)